

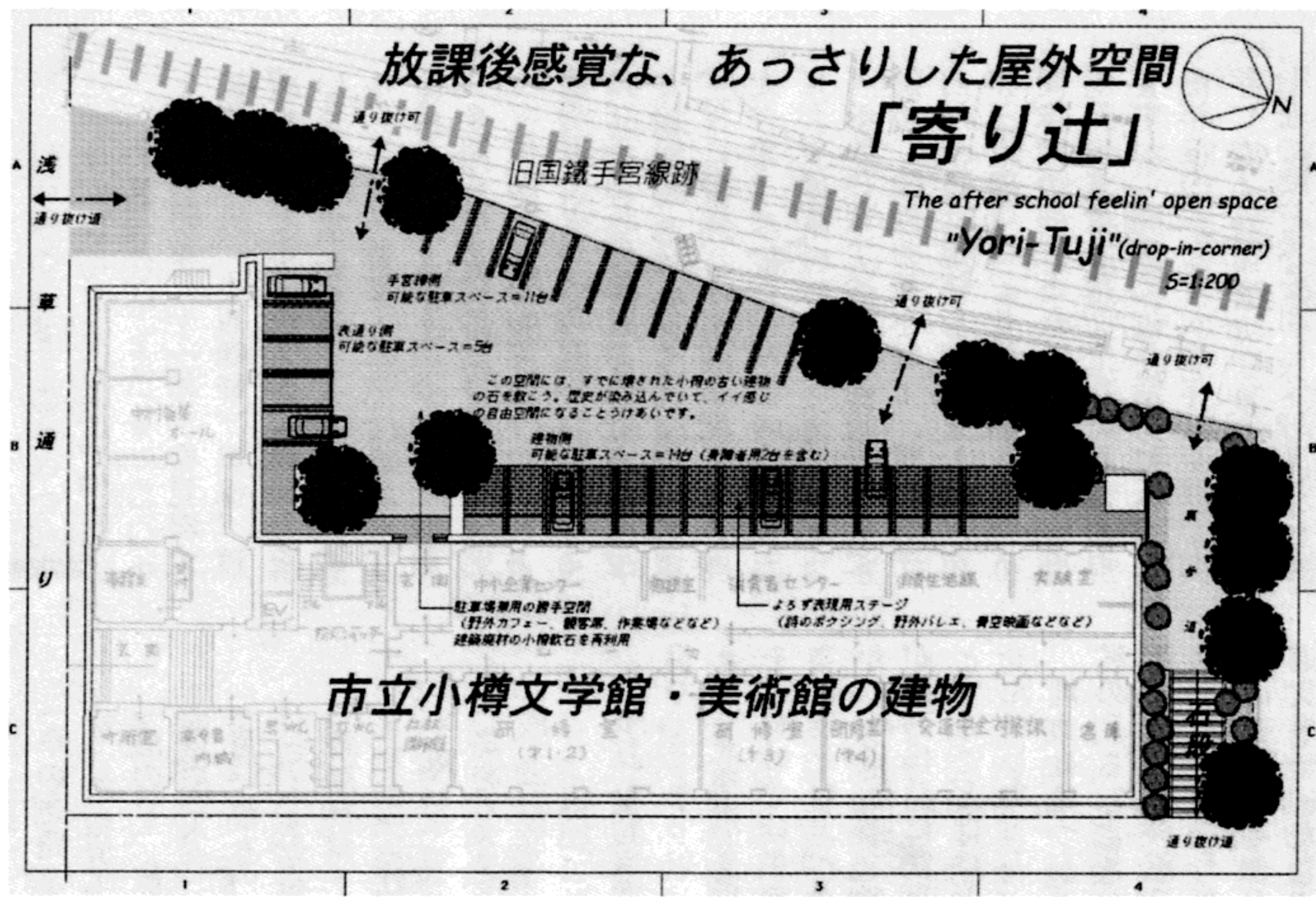


Title	都市の風景、あるいは明日のためのオープンスペース
Author(s)	片桐, 保昭
Citation	市立小樽文学館報, 30, 12-14
Issue Date	2007-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/30128
Type	article
File Information	otaru30-1.pdf



[Instructions for use](#)

市立小樽文学館報



片桐保昭氏作成「寄り辻」のアイデア平面図（「都市の風景、あるいは明日のためのオープンスペース」より）

第30号
平成19年3月31日

目次	
千田三四郎への誘い……………	亀井秀雄
平成十八年度事業報告・十九年度予定事業	11
都市の風景、あるいは明日のためのオープンスペース	2
片桐保昭	
小さな力から大きな力へ……………	小路嘉史
	15

都市の風景、

あるいは明日のためのオープンスペース

片桐保昭

市立小樽文学館・美術館（小樽市役所分庁舎）の南側は駐車場となつている。いや駐車場というより中古車置き場のような。一応、平らに均されてはいるが、砂利と土がだんだらの灰色を織りなし、所々剥げたコンクリが延ばされているその地面は侘びしく、周囲のプレハブ建物や雑草もあいまった日陰者の風情は、来館者をして斜陽小樽の行く末に暗い思いを抱かせるに充分なものである。



小樽文学館・美術館駐車場の現況

しかし、この文学館の駐車場の空間は、自然発生的な車置き場のまま「放ったらかし」にしておくには非常に勿体ない空間なのである。この

「駐車場」の空間は、とても素晴らしい可能性を秘めており、少し手を加えるだけでそれは開花する。文学館にとつてだけではなく、近代日本の歴史が刻み込まれた小樽の街並みをさらに素晴らしいものにする事が出来るのである。本論において私は、この空間の可能性を紹介すると共に、では私たちはこの空間に対してどうすべきなのか？それを提言したい。

■建築博物館の街とその内省的魅力

小樽の街並み、とくに文学館周辺は小樽運河やその周辺にあまたの石造建築群が貴重な産業遺産と認知され、さらに、明治からの木造建築や初期の鉄筋コンクリート建築などが現役で使われている。この中で小樽文学館と美術館のある建築は、戦後の昭和二十七年（一九五二）年に竣工したものであるが、当時の郵政省設計課長であった小坂秀雄（一九一〇—二〇〇〇）の設計によるものである。小坂は山田守（一八九四—一九六六）や、幻の建築家とも呼ばれる森泰治（？—一九五一）らが完成させた、いわゆる「通信スタイル」の流れを汲む建築家である。この建物はガラスのカーテンウォールを用い

た機能主義的なデザインの初期の例としては、我が国ではほとんど残っていない貴重なものである（片桐二〇〇一）。つまり、市立小樽文学館と美術館を含めたこの界限は、木造から鉄筋コンクリートまでの近代建築が揃う、街全体が建築博物館といつてよいものである。

ご存じのとおり、この建築博物館の街並みは小樽の観光資源となつており、外国からも多くの人たちが訪れ、古びた重厚な風景を逍遙する。文学作品にも多く登場するが、文学作品での小樽の風景は、登場人物の内省と相まって登場する。重厚なテクスチャに抑えた色彩が織りなす風景はまさに現代人の「内面」を彩る背景にぴたりなのである。映画「ラブレター」（一九九五）も小樽を舞台としているが、インディーズ時代から一貫して独特の抑揚を表現してきた映像作家である岩井俊二監督らしく、色彩も科白も抑えられた内省的なものであった。

■街の美質を高める「空間」とは何が？

文学館の駐車場は、そんな風景のただ中の空地である。となると良識からいっても常識からいっても、人々の想像力をかき立てる空間であることは間違いない。そもそも、街並みだろうが自然であろうが、風景を感じるためには、ある程度の距離が無くてはならない。日銀小樽支店の建物の壁に張り付いてみたところ

で、何百年かかろうと、その建物の形はわからない。街並み風景は、私たちと街との間に広がりがある。その「風景」として観賞できるのである。この広がりや「都市空間」というのである。

古代の哲人アリストテレスがなかなか洒落たことをいっている。彼は空間という言葉ではなく空虚（kenon）という言葉を使っているが、純粹に空虚であることは無限の宇宙のまつただ中でもないことである。空虚は何もないことであり、それは周囲を囲われることによつて規定されるとしている（アリストテレス一九六八）。これに倣うと都市空間はまわりの建築物があるからこそ都市空間として存在できるということになる。そしてこの何もない空間に身を置くことによつて我々は、風景を感じ取ることが出来るのだ。

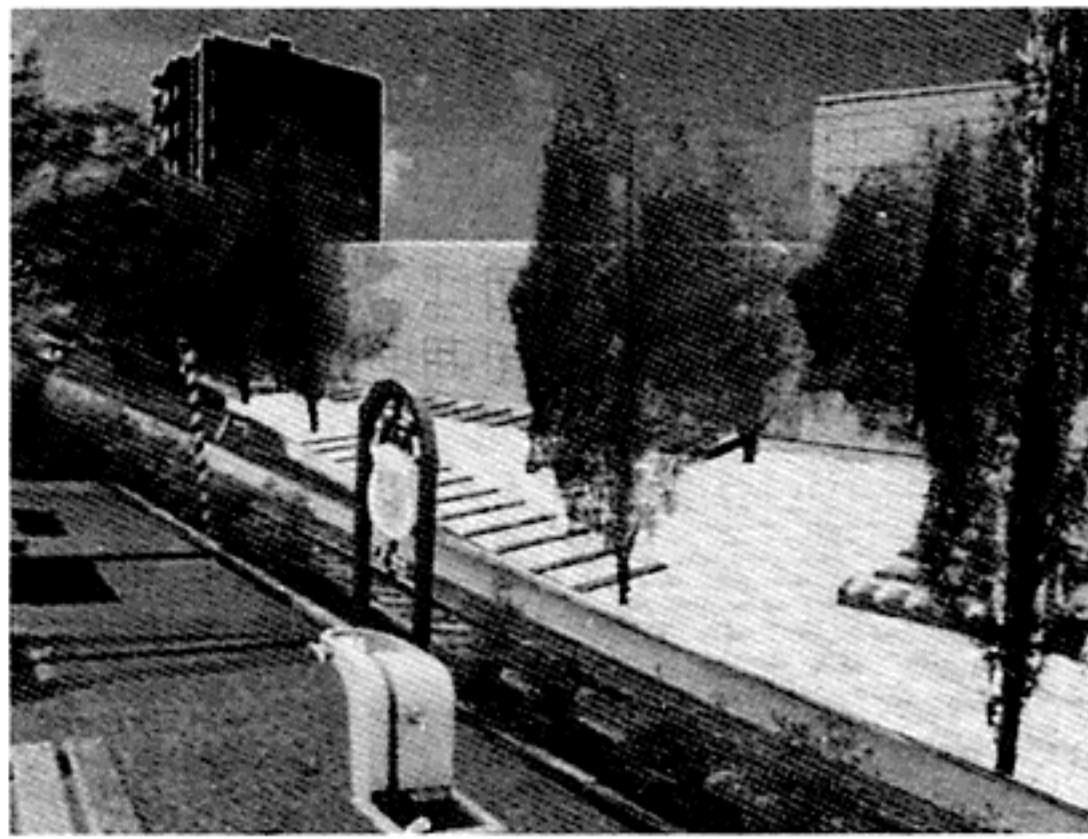
■「寄り辻」の提示

この空間に余計なものがあると、内省の邪魔になることは言うまでもない。文学館の玉川副館長からこの空間を何とかしたいという御相談をいただいた時に思ったのは、このことであつた。基本的に何もすることはないのである。ただ、そこに身を置く人にとつて、周りの風景を受け入れるための「何も無さ」が、担保されていることが、最も重要だと考えた訳である。二〇〇六年に文学館で開催された企画展「小樽・文学館

物語」では市民が思い思いの文学館のアイデアを開陳するものであったが、私もその中で、文学館の駐車場についての一つのアイデアを提示させてもらった。

それが「寄り辻」というものである（表紙参照）。どういふものかというのと、現在の駐車場にある二棟のバロックと塀を取り払い、とれるだけの空間を取った、いたってシンプルなものである。加えるものは、樹を数本だけである。舗装には小樽の建物の建築廃材、特に軟石を使うことを想定した。

「寄り辻」という呼び名は、小樽文学館の活動のユニークさにあやかっ



CGによる簡易パース

眼レフカメラの展覧会、あるいはリコーダーのコンサートに携帯ゲーム機の講習会など、次々と面白い企画が行われる。中古パソコンや古本が雑然とした館内には学校帰りの小学生がボランテアにうろちよろしている。こういった情景を眺めていると、誰でもそうだったろうが、かつて放課後に下らないことに熱中していたことが思い出される。そこで、放課後感覚で寄つてもらえればそれ以上の空間は要らないだろうということ、「寄り辻」ということにしたのである。

■「寄り辻」の造作

造作については、風景に内省を感じるときに邪魔になりそうなものを一切排除することが望ましいと考えた。すると現行の駐車場内にある場違いなプレハブ小屋二棟は取り払った方がよいに決まっている。建築博物館の中に存在する必然性が無いだけではなく、存在することによつて周囲の風景の質を貶めている。

また現状で簡易な舗装がされているが、これも不陸だったり、ぼろぼろのアスファルトであつたりと、必要以上に汚い。汚いのは小樽全体が汚いので仕方がないが、この駐車場の汚さは、街全体の景観からも浮いている。浮いているということは変に目立つということだ。また通常のアスファルトやコンクリートで

舗装すると今度は、パスタの中に羊羹を入れたようで、これまた場違いなことこの上ない。そこで周囲の歴史的建築物に使われている軟石が良いのである。最も良いのは小樽の建物の廃材から持つてくることだ。要は、この空間は街並み風景を感じ

「間」が今の風景以上に主張してはいけないということなのである。最小限の使い勝手を考え、自動車が駐車するであろう部分とイベントにつかうであろう部分は舗装の調子を変え、識別性を持たせた。また文学館に出入りする人たちによると、夏場の日射しがとても暑いそうなので、南側に木立を植えて、日陰を提

供できるようにした。このすぐ南側には旧国鉄手宮線がある。これも北海道では最も古かつた鉄道として現在は緑道として保存されているが、ここは駐車場を結びつけば空間が広がり、何かの時には一体的に使えるので、塀を取っ払うことを考えた。

以上が「寄り辻」の造作である。類似の施設、例えば公園などに比べたら、余計な施設が無いぶん、はるかに安上がりな「都市空間」である。ベンチだのは使う人たちが必要と判断したら持ち込めばいいものであり、ここでは全て省いた。

■現在の都市空間造営の問題点

面白いことに現在の法律では、こ

のようなシンプルな空間を都市に作るのとはとても難しく、お上が公共事業でつくるなどという事はまずあり得ない。「都市空間」は都市計画法上は公園緑地などの「都市施設」で無くてはならない。そして公園緑地は市の「緑の基本計画」で決められていなければ作ることは出来ない。さらに公園緑地という「都市施設」では都市公園法及び施行令上、敷地内の緑の量や遊具などの基準が決められており、何も無い空間は作れないことになっている。景観法や都市緑地保全法上は今ある空間を保全の対象には出来ても、法による規定のない新しい空間は作ることは出来ない。

要するにお上に期待しても無駄だということである。お上は公園や広場といった「施設」は作ることは出来ても、空けたままの空間は（こつちの方が安上がりだというのに）作れないのである。そして「公園緑地」をどこに作るかは、ほとんどの場合役所（と出入りのコンサル業者）が多くて数ヶ月の時間と予算の制約の中で適当に決めるのであつて、一市民がこの過程に口を出したとしても、幾多の訳知り役人（あるいは議員）が持てる知識を総動員して足を引っ張つてくるので、その意見を反映させようとしても大体、徒労に終わる（これに比べて役所の間は思いつきの場所に公園を作らせることがある。かつて設計事務所に勤めた私はそん

な現場を数多く見てきている。

本当は制度の抜け道などいくらでもあるのだが、質の向上よりも法の裏付けと前例の踏襲が大切なのが役所である。こうして誰のためにも毒にも薬にもならない公園に予算がつけられ、気づかぬうちに作られ、さらに予算がつけられ、気づかぬうちに改修されていく。

■「広場」とは異なる思想

何も無い「都市空間」、こう書くとも必ずヨーロッパの都市にあるプラザだのフォーラムだのといった中央広場を引き合いに出す者が必ず出てくる。

ヨーロッパの都市にあるプラザは教会など宗教施設に付帯するものがあり、それは中央に自分たちの神を奉り、人々を従わせるといふ宇宙観の反映である。確かに欧州の広場では民会や市が立つ。しかし魔女裁判の犠牲者を火あぶりにしたのもこの広場においてだ。欧州の広場は民主社会の反映ではなく、神のおわす宇宙の秩序が地上に定位された印なのである。これは近代民主主義の理念よりも深く、欧州人達の文化に染みついていく。だから専制権力も市民も代表者もみな広場へと、都市の中心へと集まりたがるのである。祭の時には広場に集まるのである。生活と広場は切っても切れないのである (Katagiri& Mitsue 2006)。



世界で最も美しい広場といわれる北イタリア、シエナ村のカンポ広場

これに対し日本の神は宇宙の中心にいないし宇宙の秩序も規定しない。遙か上の宇宙ではなく遙か奥の山中森の中におわす。神社で拍手でも打てば神様の方からやつて来てくれる。祭の時には神様が御輿に乗って街中を順に練り歩く。そして西欧のマネをして作ったフォーラムだのに人は集まらず、閑古鳥が鳴くのである。

地方都市の○○委員会などによく「日本の都市はヨーロッパに比べて遅れている」というような明治鹿鳴館を思わせる大時代的暴言を吐く学識経験者の類が今だに存在していることに驚かされるが、ヨソをマネしてこれ見よがしの「施設」を作ったところで、その末路がどうなるかは夕張市を見れば明らかであろう。

■明日のための空間へ

博物館は展示を通じて利用者が何

らかを学習するための施設である。日常ではお目にかかれない展示物を集めて見せるのが博物館であるのは当然だ。これは文学館とて同じである。だから文学館というものは展示物を集めた建物自体であり、来館者はこの建物の中で展示物を観賞して学習したり、あるいは楽しんだりするわけである。だから博物館という建物のことだと思っている人は多いし、また熱心な人であつても、博物館が博物館たる所以はその建物と展示内容であると考える人が多く、これはこれで法的にも正しい。

が、これからの博物館はそれだけではやっていけないであろう。建物の枠を越えて、地域住民や来客に寄与することが求められている。優れた自然地域全体を保全したり再現するエコミュージアムや、地域の人々の暮らしをそのまま展示するオープンミュージアムの試みはその一例であろう。

そして小樽文学館・美術館の境界は既に多くの人が訪れる建築博物館である。この景観を展示に取り込み、さらに地域の環境や美観全体を向上させるにあたって、この駐車場を使わないというのはいかにも非常識であると思う。ホンの少し手を加えるだけで、シンプルでも無い空間となり、それは都市景観をぐっと引き立てる。まさに歴史の悠久を感じさせるに充分な空間を作ることが出来るのである。これはまた、欧米式の

公園緑地「施設」に偏重した、現在の都市政策へのユニークな提言となるであろう。

さらに文学館・美術館の開催するコンサートや朗読会など数々の文化イベントに格好の場所を提供することになる。文学館・美術館だけではなく、隣接する旧国鉄手宮線で行われている「雪あかりの路」「旧手宮線・写真展」などの市民によるイベントとリンクすることによって、また様々なブレイクスルーが期待できる。

単なる駐車場にしておくには、余りにも勿体ない空間であると同時に、市民自身が、歴史を継承し新しい可能性を示すことが出来る空間なのである。

参考文献

- アリストテレス(一九六八)「アリストテレス自然学第四巻」(「アリストテレス全集」所収) 出隆・岩崎允胤訳、一四二―一五九頁 岩波書店
- 片桐保昭(二〇〇一)「爽快なリズムの建築」(「一原有徳/新世紀へ」六〇―六三頁所収) 市立小樽美術館・市立小樽文学館
- KATAGIRI, Yasuaki & MITSUE, Masahiro (2006)
- "OpenSpaces of Traditional Societies" in Journal of Landscape Architecture in Asia, vol.2, pp.39-44.